

『現代漢語詞典』第6版の音声と音韻について

田 威・徐 英 東

要旨 本論文は、現代中国語の音声と音韻を中心に、この二つの問題に対する、最新版(第6版)『現代漢語詞典』の扱い方について論議した上で、いくつかの提言をしている。

1. 一部の漢字の発音注記が標準語(普通話)の実際と食い違っていることを指摘して、大多数の標準語話者の発音に合わせて改めて注記するよう、提案している。

2. 横文字を含む語における横文字の発音注記がなかったりする事実を指摘して、中国語に取り入れられたすべての横文字に対して一貫した発音注記を施すよう、提案している。

3. 語アクセントの存在を実例をあげて証明し、語アクセント注記付きの辞書が皆無である現実をふまえて、見出し語にアクセントをつける辞書を出版したならば、それは中国語教育や現代口語研究に大いに貢献したことになるだろうと強く提案している。

キーワード 音声 音韻 発音注記 アクセント 横文字

提要 本論文以现代汉语语音和音韵为中心, 讨论了《现代汉语词典》第六版在这两方面的处理方法, 在此基础上提出若干项建议。

1. 指出部分汉字注音与普通话的语言实际不同, 建议按大多数说普通话的人的实际发音重新注音。

2. 指出含有西文字母的词中的字母有很多没有标注发音, 建议系统地对所有字母标注普通话发音。

3. 用实例证明现代汉语中存在词重音; 指出现在还没有一部标注词重音

的汉语词典的现实；认为如果出版一部标注重音的汉语词典，则对汉语教育和现代口语研究功莫大焉。

关键词 语音 音韵 注音 词重音 西文字母

1. 漢字の音表記

1.1 中国語の実情を反映する音表記

標準語における漢字の発音は従来、絶対多数の北方人の読み方の実情に従う（これを中国語で「从俗从众」という。“俗”も“众”も「民衆が日常話す話し言葉」を指す）という不文律がある。

全人口の70%を占める“官話”（ほぼ北方方言に相当）地域で普段使われている発音は標準音の基礎となる。つまり漢字の標準音は、この地域の人々の漢字の読み方によって決定され、彼らが共通して使うものが、その漢字音の正しい発音とされる。これが通例である。

日本の友人が、次のような経験をしたことがある。学生時代、“一会儿”を“yīhuìr”と辞書のピンイン通りに教えられ、そのまま覚えていた。ところが先年、中国語の教科書を作る段になって、教えられた通りのピンインをつけたところ、若い人から「“yīhuìr”とすべきだ」と指摘されてびっくりした。そこで『現漢』（『現代汉语词典』の略称。以下同じ）を調べてみるとやはり“yīhuìr”だった。自分のほうが間違っていたことになる。しかし、ずっと昔から、中国の人が“yīhuìr”と言うのを聞いてきたのである。

それで友人は「昔の発音は間違っているのか」と筆者に聞いてきた。両方も正しいと答えると、今度は「じゃ、どうして辞書は、第三声の発音を取りやめたのか」と食い下がってきたので、答えに窮して、返す言葉がなかった。

今回の第6版では“一会儿”（p.1525）に「第三声とも読む」という注をつけて、もとの発音を復活させたので問題は解決した。

第3版（1996年）では、強引にも“打的”を“dǎdī”と読ませていた。しかし、標準語を話す中国人の誰もが、それを無視して“dǎdī”と言っていた。中国語を学ぶ外国の人は、なぜ100%の中国人が間違った発音をするの

だろうと不思議がったにちがいない。

第5版になって“的”に「話し言葉では第一声とも読む」という注をつけるが、存在しない第二声を取り下げようとしなない。もちろん“的士”は“dīshi”のまま堅持していた。

ところが、今回の第6版では“打的”や“的士”だけでなく、新たに追加した“的哥”や“的姐”など、タクシーを指すすべての“的”を、第一声の“dī”に正して徹底させた。これは全く“从俗从众”の正しい改訂で、辞書はこうでなければならないと思う。

次の字音も同じように、中国語の実情を重視して発音表示を改めた例と言える。

第5版

谶③Chén, 也有读 Shèn 的 (p.169)

苣荳菜 qǔ · māicài (p.1128)

第6版

谶③Chén ㄔㄨㄣˋ (p.161)

谶 Shèn ㄕㄨㄣˋ (p.1159)

苣荳菜 qǔ · maicài (p.1073)

これらは、絶対多数の人が使っている読み方の実情に従った改訂で、歓迎されるべきことである。

また、山東方言から生まれた姓氏の“牟” (p.919, 924) も、第5版までは“móu”のみだったが、第6版では“mù”も追加している。ただ、これですべての“牟”の発音が適切に処理されたとは言えない (ちなみに、地名“牟平”“中牟”などの“牟”は古来“mù”である)。

そもそも“释迦牟尼”という見出し語が収録されていないために、その“牟”は、どう読むのかが分からない。もし将来“释迦牟尼”を追加する場合、この“牟”を“móu”と“mù”のどちらにするかが問題として残ることになる。

任継愈 (1981)、呉汝鈞 (1992)、羅竹風 (2007)、夏征農・陳至立 (2009) などは、サンスクリット語の発音にしたがって、“牟”に当たる音節をローマ字音“mu”と転写しているから、当然“mù”と読むのが原音に近い。

また、傍証になるが、世界の文字研究会 (1993) によれば、日本語と朝鮮語では“mu”と読んでいる。これは中国の中古音の借用と考えられる。

残念なことに、“释迦牟尼”の項目を取録した前述の文献（辞書）には、その読み方がつけられていないため、“牟”の発音は当然のことながら分からない。

“释迦牟尼”を取録している『応漢』（『应用汉语词典』の略称）と『規漢』（『现代汉语规范词典』の略称）は、なにをよりどころにしたのか分からないが、“牟”を“móu”と読ませている。しかし、筆者の知っているところでは、一般の中国人は“mù”と読むのが大多数である。

以上をまとめると、“释迦牟尼”の“牟”は、①サンスクリットからのローマ字音が“mu”であり、②中国地名（“牟平”“中牟”など）でも“mù”と読み、③地名にちなむ姓も同じ発音になる。また、中国音由来の朝鮮語、日本語も“mu”である。だから、『規漢』がこれらの事実をふまえて“mù”という発音を示せば、原語の発音を尊重することにもなるし、多数派の一般人の実際の読み方にも合致することになるだろう。

1.2 いくつかの漢字音についての検討

周知のように、辞書の改訂には進行形があっても、完了形はないものである。次の語の発音は、将来『規漢』第7版で改訂していただけると、読者のためになろうかと思う。

(1) 轱辘 gū·lu① (p. 463) 𨋖车轮 (車輪)。

この語は、名詞「車輪」という意味の場合、標準語を話す北方の人は第二声で“gú·lu”と読む。第一声の“gū·lu”と読めば動詞「転がる、転がす」という意味になる。李栄（1997）は（“骨碌”と表記するが）このように読み分けている。

したがって、動詞と名詞をそれぞれ“轱辘¹gū·lu𨋖”、“轱辘²gú·lu𨋖”と2語にするよう提案する。

もちろん、実際に声調の違いによって品詞が変わるかどうかは、北京などで調査してから決める必要があると思う。

ついでに述べておくと、“骨碌 gū·lu𨋖” (p. 464) と“轱辘 gū·lu𨋖”とは、完全な同音同義語なので、2語として扱う必要はない。必要がないどこ

るか、かえって読者の混乱をきたすだけであろうから、“轆轤”に統合すべきである。

(2) 贱骨头 (p.638)

蚂蚁啃骨头 (p.864)

软骨头 (p.1109)

硬骨头 (p.1565)

以上の“骨头”は全部“gū·tou”と読ませているが、普通官話区の話し言葉では“gú·tou”という人が決して少数派ではないし、純粋な北京語はやはり“gú·tou”である。

以前の辞書、例えば1947年出版の『國語辭典』¹⁾では“gú·tou”としている。これは、伝統的な発音の規範に合致している。

なぜ“骨gū”を“gú”と読むかといえば、必然的な理由はないと思う。例えば“的士”の“的”には、もともと“dī”という音などなかった。つまり、それは間違った発音だったのであるが、みなが“dī”と言い慣わしたものであるから、間違った“dī”が、正しい“dí”に取って代わって、市民権を得たのである。

(3) 那 nà^① (p.927) **注意** 在口语里,“那”单用或者后面直接跟名词,说 nà 或 nè;“那”后面跟量词或数词加量词常常说 nèi 或 nè。以下 [那程子]、[那个]、[那会儿]、[那些]、[那样] 各条在口语里都常常说 nèi- 或 nè-, [那么] [那么点儿] [那么些] [那么着] 各条在口语里都常常说 nè- (“那”は、単独で用いたり、名詞が後接したりする場合、“nà”か“nè”と発音する。あとに助数詞や「数詞+助数詞」が来る場合は、“nèi”か“nè”と発音する。次の“那程子”“那个”“那会儿”“那些”“那样”など各項の中では、話し言葉でいつも“nèi-”または“nè-”と発音するし、“那么”“那么点儿”“那么些”“那么着”では話し言葉でいつも“nè-”と発音する)。

1) 《國語辭典》中國大辭典編纂處編、商務印書館、1943年出版。筆者が利用しているのは1962年精選復刻版。

那 nè (p. 937) “那” (nà) 的口语音。参见927页“那”条 **注意** (“那 nè” の話し言葉的発音。p. 927 “那” 項の **注意** を参照)。

発音 “nè” の出自は、はっきりとは分からないが、陳剛 (1985) によれば河北省三河 (廊坊市所轄) 地方の方言の影響だそうである。

そうだとしても、ごく限られた一地方の発音を標準語に取り入れるべきではないと思う。例えば“那可不行!” (それはいけない)、“真有那么多人吗?” (ほんとうにそれだけ人がいるの) などの“那”が“nè”となって耳に入ると、“讷”と同音のように響いて不自然にさえ聞こえるのではなからうか。

この“nè”という音についての補注は、少なくとも第3版からあるが、なぜなのだろうか。

思うに、“那些”“那样”などは、インフォーマルなコミュニケーションでは、確かに若干“nè-”のように聞こえるが、これはあくまでも母音音素 /a/ の異音 [a̠] にすぎず、決して /a/ とは異なる、独立した /a/ という音素ではない。

同じ理屈の例を挙げると、“爸爸”の二音節目の“ba”は、若干“be”のように響くという現象が見られる。しかし、だからといって「この二音節目の“ba”は“be”と発音する」といった補注をつける必要があるとは思えないし、また実際、そういった補注はついていない。

“那么”系の“那”は直後の“么”の声母の影響で、“nà → nè”という連声 (sandhi) が起こる。これは“那”の韻母“a”が、ルーズな発音では“e”に変わることがあるためであるが、この明らかに違って聞こえる音変化に補注を加えなければ、外国人学習者は、いつまでたっても、自然な響きの“nèm·me”という発音ではなく、おそらく“nà·me”という、やや不自然な発音をしてしまうであろう。もちろん“nè·me”では、もっと不自然になることは言うまでもあるまい。

なお“那程子”系における“那”の“nèi”の発音は自然な響きなので、そのままがいいと思う。

(4) 这么 zhè·me (p. 1650) **注意** 在口语里经常说 zè·me (話し言葉では通

常 zè·me と発音する)。

“那么”の連声の場合と全く同じ理屈が働いているわけであるから、「話し言葉では普通 zhèm·me か zèm·me と発音する」と補注をつけるだけで十分であろう。

付け加えれば、“这么点儿”、“这么些”、“这么样”、“这么着”の4項においても、これに準じた記述が望ましいと思われる。

(5) 柏 bó (p.99) 柏林 (Bólín), 德国首都 (ベルリン、ドイツの首都)。

ベルリンの場合の“柏”は“bó”という発音に問題はないが、次のような場合はどうであろうか。

地名: 柏柏尔 (スーダン・ベルベル)、柏培拉 (ソマリア・ベルベラ)、
都柏林 (アイルランド・ダブリン)

人名: 柏拉图 (ギリシア・プラトン)、柏辽兹 (フランス・ベルリオーズ)、
柏琴 (イギリス・パーキン)、柏格森 (フランス・ベルクソン)、
叶斯柏森 (デンマーク・イエスペルセン)

遺跡: 柏威夏寺 (カンボジア・プレアヴィヒア寺院)、柏孜克里克石窟
(中国・ベゼクリク千仏洞)

これらは、いくら『現漢』を調べても正解は得られない。全く言及していないからである。外国語または中国の少数民族語の固有名詞であるから、読者が“bó”と類推するのは当然であろう。

筆者は北京、天津、河北、陝西、山西、武漢、上海、江西、山東、遼寧、吉林、黒竜江、内蒙古の出身の大学生、教員、そして少数の職員など、計39人を対象に、“柏”を含む語彙についてのアンケート調査(以下「39人資料」と呼ぶ)を行なった。

結果は、“bó”と読むと答えたのが38人で、全体の97.44%であった。“柏林”の“bó”からの類推なのだと考えられる。

なぜ“bó”と読むかと問われたら、答えに窮してしまう人もいるはずである。

では、どうすればいいか。例えば『規漢』p.96 “柏 bó”のように“音译用字”(音訳用漢字)と注釈すれば、一応、問題は解決される。

しかし「^{かしわぎ}柏崎」などの場合はどう読むかという問題が、まだ残っている。これは“bó”と読むわけにはいかない。なぜなら『現漢』p.29 “柏 bāi”は「柏の木／側柏」と解釈している。したがって「柏崎」の“柏”は“bāi”と読むべきである。

「柏」を含む、よく知られた日本の地名は20以上もあり²⁾、苗字では170以上もあって³⁾、無視できない数である。中国語に訳される日本の固有名詞は、西洋の固有名詞の場合とは異なり、漢字の中国語読みをするので、この「柏」は、音訳の“卡西挖 kǎxīwā”ではなく、中国語読みの“柏 bāi”になる。

そこで、親文字としての“柏 bó”の解釈として、「音訳固有名詞に使われる漢字。ただし日本の固有名詞の場合は bāi と読む」とでもすれば、どうであろうか。

(6) 蒙 měng (p. 890) 蒙古族 (モンゴル人)。

「柏」と同じように、発音によって意味が違う「多音字」である。『現漢』に従えば、“měng”は「モンゴル」の一語のみを指す音訳専用文字である。だから、音訳語“蒙太奇”(p. 889、モンタージュ)の場合、“měng”ではなく“méng”が当てられているのだと考えられる。

『現漢』には収録されていないが、“罗蒙诺索夫”(ロモノーソフ1711-1765)、“莱蒙托夫”(レールモントフ1814-1841)、“蒙哥马利”(モントゴメリー1887-1976)、“蒙特利尔”(カナダ・モントリオール)、“埃德蒙顿”(イギリスとカナダのエドモントン)、“蒙罗维亚”(リベリア・モンロビア)など音訳の固有名詞に含まれる“蒙”も、前記の仕方から類推して、やはり“méng”であろう。

実際に、筆者の周囲の大学教師や学生に読んでみてもらったところ、第三声“měng”であったり第二声“méng”であったり、甚だしい場合は、同一人物が同じ語を両方に読んだりもする。

しかしながら、同じ外来語の発音が統一していないのは望ましいことでは

2) 《日本地名辞典》陈达夫等编、商务印书馆、1983年第1版、p. 994漢字索引を参照。

3) 『苗字8万よみかた辞典』北京大学出版社、1999年を参照。

なく、語として意味をもたない音訳の“蒙”を、“蒙古族”(モンゴル人)という場合も含めて、すべて“měng”に統一するのが最善の策ではないかと思われる。

もし、既成事実として存在するばらつきを変えるのが難しいのなら、親文字の語釈に「音訳語“蒙古”の省略(例えば、“蒙語=蒙古語”“蒙族=蒙古族”)。ほかはすべて méng とする」とすれば、問題は解決できる。

ところが、元代(1206-1368)の憲宗“蒙哥”が“měng”なのか“méng”なのか、これも問題である。“蒙哥”の“蒙”は蒙古人の名前の音訳であって、“蒙古”の略ではないから、“měng”と読むわけにはいかないであろう。

“蒙太奇”から類推すれば、“ménggē”となるはずであるが、テレビドラマの台詞やテレビに出演する歴史学者の話などでは、“měnggē”が主流ではないだろうか。

同じ音訳語なのに、“蒙太奇”が“méng-”で、一方、“蒙哥”は“měng-”と読まれるのでは、不都合であろう。だから、これも音訳の“měng”にしたほうがいいだろう。

(7) 大都 dàdū (p. 239) (口語中也讀 dàdōu) (話し言葉で dàdōu と読む)。

第5版までは、括弧の中の補注は存在しなかった。もちろん進歩と言えよう。ただ、この程度の補注では、“dàdōu”は、許容された発音のひとつという印象を与えかねない。

ところが、事実はどうであろうか。先ほど述べた「39人資料」によれば、“dàdōu”という人が89.7%、“dàdū”はわずか10.3%にすぎない。調査の地域と対象人数をもっと拡大すれば、数字に変化はあるかもしれない。しかし、数値が逆転して“dàdū”が多数になる、といったことは決して起こらないと筆者は信じて疑わない。

古代漢語で“都”は、いかなる意味においても“dū”という一音しかなかったため、杜甫の『喜雨』“農事都已休，兵戎況騷屑”(百姓仕事はもう何をしてもだめだ。そのうえ兵乱はうちつづき、騒がしい)の中の“都”は、たとえ「すべて」や「全部」の意味であっても、“dōu”ではなく“dū”と

読むべきである。しかし、現代語（特に1949年以降）では「都」、「都会」、姓を表わす以外、すべて“dōu”に統一されている。

したがって、“dādōu”を規範的発音とし、許容される古い発音（中国語では“老国語”）として「dādūと読む人もある」という補注にすべきであろう。

(8) 法子 fǎ·zi (p.354) (口語中多読 fǎ·zi) (話し言葉で fǎ·zi と読むことが多い)。

“多読 fǎ·zi”の補注は、現代語の実情に合致するものとして、第5版までよりは大きな進歩といえる。先ほどの「39人資料」でも“fǎ·zi”が81.6%、“fā·zi”が5.3%で、実際に“fǎ·zi”と読んだ人は、13.1%と少数派であった。

“fǎ·zi”は、実際は北京方言の“法儿 fǎr”から来ていると思われるが、これは別としても、“fǎ·zi”を規範発音にして、「fǎ·ziと読む人もある」と補注すべきであろう。

もちろん、このように修正するときは、“法”を「多音字」として“fǎ”を加えておく必要がある。

(9) 沿 yán (p.1497) ④(～儿) 沿边 (多用在名词后) (ふち、へり、ほとり。普通、名詞の後につく)。

「水のほとりや、器などのへり・フチ」の意味を表わす“沿儿”は、「その内側に水などの液体が入っている、または液体を入れることができる」という共通の意味特徴がある場合、“yànr”と読まれる。例えば官話区で、“河沿儿”“江沿儿”“沟沿儿”“盆沿儿”“缸沿儿”“锅沿儿”“坑沿儿”などは例外なく“yànr”であって、“yán(r)”という人はいないだろう。

『現漢』が挙げている“边沿”“炕沿儿”“前沿”は、「中に水などの液体が入らない」ので、もちろん“yán(r)”である。

徐世榮 (1990) も“河沿儿”の項において、“沿儿”は必ず第四声でなければならないと言っている。標準語の実情に合う補注である。

中古音は“yán”にあたる“与专切”のみであるが、現代の話し言葉では、意味の分化によって、新たに去声の“yàn”が派生したと考えられる。現代標準語の実情に合わせて“yànr”の補足を提案する。言うまでもないが“儿

化音”の併記は必要である。

(10) 混 hùn (p. 586) ①ㄏㄨㄣˋ 掺杂 (入れ混ぜる、入り混じる)。

中古音は、第三声の“胡本切”となっているからと考えられるが、『國語辭典』は「ごちゃごちゃしている様子」や「はっきりしない様子」といった意味では、“hūn”としている。

例えば、二人の名前を反対に覚えてしまった場合、官話区の間人は“混 hūn 了”という。先ほどの「39人資料」でも、第三声が74.4%、第四声は12.8%にすぎない (ちなみに第一声が5.1%、第二声が7.7%である)。

第四声の回答者は、主に、官話区以外の南方人で、その発音は『現漢』など辞書の影響かもしれない。現代標準語の実情から考えて、第三声の復活を提案する。

(11) 大伯子 dàbāi·zi (p. 238)

徐世榮 (1990) も同じ読み方をしている。しかし、筆者の知る限りでは、北京でも“dàbāi·zi”ではなく“dàbāi·zi”が圧倒的多数である。

三代以上、北京在住の北京っ子であるかどうかは確かめていないが、友人の80代の北京人が“dàbāi·zi”は聞いていないと言い、もう一人の60代の北京人は“dàbāi·zi”なんてありえないとまで主張している。二人とも“dàbāi·zi”である。

また、陳剛 (1985) は“伯伯” (伯父さん) を“bāi·bai”と読んでいることは問題の“伯”が“bāi”だという傍証にはなる。子どもの“伯伯”は、その母親にとってまさに“大伯子”なのである。

事実「39人資料」では、“dàbāi·zi”が53.9%、“dàbāi·zi”は12.8%と少数派。残り33.3%は南方人の“dàbó(·zi)”であるが、この“dàbó(·zi)”は、いわゆる読書音 (古い文章語の発音) である。

したがって、“dàbāi·zi”を規範的発音にして、「dàbāi·zi」と読む人もある」を補注とすれば、現代標準語の実情に合致する。

2. 横文字を含む語の扱い方

2.1 横文字の音表記

『現漢』付録部分のまえに、アルファベットなど、横文字で始まる単語がまとめられている。筆者の統計では239語になるが、このうち9語に、漢字による横文字の発音が付されている。次の下線部が、それに相当する（下線は筆者が付した）。

α粒子：阿尔法粒子

α射线：阿尔法射线

β粒子：贝塔粒子

β射线：贝塔射线

γ刀：伽马刀

γ射线：伽马射线

TNT：梯恩梯

X刀：爱克斯刀

X射线：爱克斯射线

上の9語以外の230語の横文字については正確な発音は明記されていない。

このほか、見出し語“滴滴涕 DDT” (p.278) や“敌敌畏 DDV” (p.279) には一応、漢字で発音を表わしているが、同じ「D」でも第一声の“滴”と第二声の“敌”があって、統一されていない。つまり中国語では、まだ横文字の規範的な読み方は『現漢』によって与えられていない。単語ができた当初から“滴”“敌”と分岐していたとしても、規範の立場からどちらか一方に統一したほうがいいだろう。

『現漢』では“阿Q” (p.1) の「Q」に、ピンインによる音表記がない。“阿婆”と“阿是穴”の間に配列されていることから、“qiū”か“qìu”のほずである。『規漢』(p.1)も音表記がないが、配列から“kiū”か“kiù”だと思われる。『応漢』(p.2)では“qiū”（また“kiū”とも読む）というふうに音表記をしている。ただ、一般の人は“kiūr”“qiūr”“kiür”“qiür”などと、

実にバラエティに富んでいるが、なぜこうもまちまちなのか、それは辞書に簡単・明瞭・規範的な音表記がないからである。

同じ文字を、人々が思い思いに読んでいると、コミュニケーションに混乱をきたすことがある。『現漢』p.1750の注によれば、洋語のままの読み方でよいとのことであるが、実際はどうであろう。

例えば「C」は、CCTVのアナウンサーを含めて北京では“sēi”が主流のようだが、そのほかでは“xī”であったり“syī”（現行の「汉语拼音方案」には存在しないが、国際音声字母 IPA の [si:] を表わすために筆者が考案したもの）であったり、各人、勝手に読んで、まことに“丰富多彩”。

いったいどれが正しいか、基準がないため、何とも言えない。洋語ではない、中国語のピンインの略語“HSK”（p.1752）や“WSK”（p.1755）などは、どう読むのか。筆者らが耳にしたのは、ピンインの読み方“hēsīkē”などではなく、英語風の“áichǐ áisī kèi”などである。

今や、読者に、中国語に入ってきたすべての横文字の規範的な読み方を示す時ではないだろうか。

近い将来の『現漢』第7版で、すべての横文字の読み方が示されれば、現代中国語に大いなる貢献をしたことになるだろう。

2.2 横文字を含む語の辞書における位置づけ

横文字で始まる単語は、辞典の後部にまとめておくことは、検索しやすいという利点もあるが、見方を変えれば、正規の語彙群ではないという印象を与える。

特に、“総目”で“词典正文”の下に、カッコ入りで、しかも“附”まで冠されていると、なおさら「ついで」「二の次」といった観が強くなる。むしろ、これらの単語も、中国語彙のレギュラー・メンバーだと認め、新たに規範的な発音を定め、ピンイン順に“词典正文”の中に組み込むべきであろう。こうしてはじめて、当たり前の辞書の体裁になるのではないだろうか。

なお、“阿尔法粒子”（p.1）“伽马刀”（p.414）と“ α 粒子”“ γ 刀”との見出し重出も“词典正文”に組み込むことによって解消できるため、辞書の

体裁上よいだろう。

3. 語アクセント注記の提案

よく知られる言語、英語、ロシア語、日本語などの単語にはアクセントがあり、辞書にそのアクセントの表示もある。また日本語の場合、『NHK 日本語発音アクセント辞典』（日本放送出版協会）、『明解日本語アクセント辞典』（三省堂）、『全国アクセント辞典』（東京堂）などアクセント専用の辞書まで出版されている。

しかし、中国語はどうだろうか。語アクセントがあるのにもかかわらず辞書では表示していない⁴⁾のが現状である。

3.1 語アクセントの存在

中国語は宋（960-1279）、元（1206-1368）以来、音韻構造の簡易化によって、単音節の同音異義語が多量に生まれてきたため、音節の弁別機能が著しく低下するようになった。

同音語の増加によるコミュニケーション上の不便さを埋め合わせるために、“目”→“眼睛”、“喜”→“高兴”、“若”→“如果”、“胡”→“为什么”のように単音節語を複音節語（二音節とそれ以上の単語）に作り直した。

語の長さが伸ばされた複音節語を話すとき、中国人は申し合わせたかのように、語中のある音節を長く伸ばして、音声の明晰度を高めている。このようにしてアクセントが生まれてきた。

中国語のアクセントの存在については、黎錦熙が『國語辭典』の序で言及しているし、旧ソ連のポリワノフ⁵⁾も、アメリカの Jerry Lee Norman（中国語名“罗杰瑞”）（1988）も、中国語にアクセントが存在することを明言して

4) 上海音楽出版社が《普通话简明轻重格式词典》（宋懷強主編、2009年12月）を出版しているが、語釈、用例がない。主に俳優の口慣らしのためのものであり、語につけたアクセントは俄かには賛同しがたいものも多いため、ここでは問題にしない。

5) 《語文建設通訊》（香港中國語文學會）2001年1月第62期、p. 64を参照。

いる。とくに趙元任(1959)には、アクセントについての正確な記述がある。

実際に複音節語を調べさえすれば、中国語にアクセントの存在することが分かる。次の語群は、ゴシック体で示したアクセントによって意味の弁別をしている(アクセント専門の論文ではないため、以下、最少の挙例にとどめる)。

biànjié 便捷(手軽ですばやい) / 变节(寝返りする)

bàntiān 半天(半日) / 半天(長いなと感じる短い間)

bàochoú 報酬(給与) / 报仇(復讐する)

bèimiàn 背面儿(後ろの方) / 被面儿(布団表)

dàzhàn 大站(主要な停車駅) / 大战(大戦)

guònián 过年(来年) / 过年(年を越す)

héshí 何时(いつ) / 合十(仏教で、合掌する)

jiāngjūn 将军(将軍) / 将军(王将を取る→困らせる)

lǎodào 老道(旧道) / 老道(道士への敬称)

méizhànqǐlái 没站起来(立ち上がらなかった) / 没站起来(立ち上
ろうとしたが、できなかった)

sànbù 散布(撒き散らす) / 散步(散歩する)

xiǎngxiàqù 想下去(考え続ける) / 想下去(降りようとする)

yuányīn 元音(母音) / 原因(原因)

zhānglì 张力(物理学で、張力) / 张力(人名。女性は“张丽”など)

yàosǐde 药死的(毒殺された者) / 要死的(死のうとする者、くたばっ
てしめえ!と罵られる者)

chàdiǎnr 差点儿(形容詞、少し劣る) / 差点儿(副詞、もう少しで…
するところだった)

tāmādesū 他妈的书(その母の本) / 他妈的书(「本」の粗野な表現)

もちろん、すべての同音異義語がアクセントによって弁別されるわけではないが、たとえ、意味弁別の働きを持たないアクセントであっても、間違えれば不自然に響いてしまう。例えば“客人”(客)、“气温”(気温)、“送人情”(歡心を買うために恩を売る)、“量角器”(分度器)といった中国語を耳にす

れば、その話し手が中国人ではないことは、一目瞭然である。

これは「ヒジョウニ」（非常に）、「ナラウ」（習う）、「オナマエ」（お名前）、「ココノツ」（九つ）……といった日本語を聞いた場合と同じである。これらのアクセントが東京語話者ではありえないからである。間違っている語アクセントについては、英語でもロシア語でも、どの言語でも同じことが言えよう。

3.2 語アクセント注記の意義

中国では、まだ語アクセントのついた漢語辞典が出ていない。中国語教員は、中国でも日本でも、どの国においても、堂々とアクセントのことを話すことができないだろう。それは規範となる権威的な辞書のお墨付きがないからである。実際、筆者の研究仲間の一人が、学習者が“今天”のつもりで“今天”と発音したのを訂正すると、学習者に『現漢』を突きつけられて、「辞書の通りに“jīntiān”と言っているじゃない、“今天”なら“天”が「軽声」のように響くのじゃないか」と文句を言われてしまった。そこで、長い時間をかけて「軽音」と「軽声」の違いを説明させられるハメになった。漢語辞典に語アクセントがついていれば、こんな目に遭わずにすんだはずである。

近い将来の『現漢』第7版が、世に先んじて『新明解国語辞典』や『研究社新和英大辞典 Kenkyusha's New Japanese-English Dictionary』などと同様、すべての見出し語にアクセントをつけていれば、中国の漢語辞典に率先垂範したことになり、そのおかげで、中国語の辞書も面目を一新するかもしれないし、その「功、大なり」と言っても過言ではないであろう。

いうまでもなく、語にアクセントをつけることは、黎錦熙が『國語辭典』の序で述べているように、大変な時間と労力がかかる、繁雑きわまる作業である。

そのため「後日に譲る」といった黎氏の願いから、すでに70年以上もの歳月が流れた。今まさにその時機到来、実現の条件も整っていることでもあるし、これを完成させて、先賢の霊前に供えようではないか。

どの音節にアクセントがついているのか判断しにくかったり、同じ語に可

能な2つのアクセントがあって、どちらを優先するか迷ったり、ほかの人から違うと指摘や批判をされて、どう対応すればいいのか困ったり、実際に作業を進めていると、面倒な問題にぶつかるかもしれない。「だから、やめておこう」と言っていたのでは、いつまでたっても埒はあかない。

学術研究のためには、批判されながら自説を修正して、そこから成長していくことこそが、学問の正しい道であろう。

参考文献（繁体字で出版されたものはそのまま繁体字にした）

- 陈刚（1985）《北京方言词典》商务印书馆，p.6，p.201“偌个”条
傅民・高艾军（1986）《北京话词语》北京大学出版社，p.61
李荣（1997）《哈尔滨方言词典》江苏教育出版社，p.59
罗杰瑞（1998）《汉语概说》（张慧英译），语文出版社，1995年第1版，中译本第1次印刷，pp.132-133
罗竹风（2007）《漢語大詞典》（縮印本），上海世紀出版有限公司・上海辭書出版社，p.6473
齐如山（1991）《北京土话》北京燕山出版社，p.213
任继愈（1981）《宗教词典》上海辞书出版社，p.1028
田忠魁（2009）「论汉语词重音」『県立広島大学人間文化学部紀要』第4号，pp.139-160
吴汝鈞（1992）《佛教大辭典》商務印書館國際有限公司據臺灣商務印書館股份有限公司第1版，1994年重印，p.558
夏征农・陈至立（2009）《辞海》第6版，上海辞书出版社，p.2081
徐世荣（1990）《北京土语辞典》北京出版社，pp.85,101,155,172
赵元任（1959）《语言问题》台湾大学出版社，p.87（本文では北京：商務印書館，1980年第1版による）
赵元任（1968）《赵元任全集》第1卷，商务印书馆，2002年第1版，pp.680-682（原書は英文、アメリカで出版、1980年に丁邦新が《中国话的文法》として中訳し最初は香港中文大学出版社で出版。他に吕叔湘の抄訳《汉语口语语法》があり、1979年北京：商務印書館で発行）
飛田良文（2008）『日本語学研究事典』明治書院，p.490「仮名文」の項
世界の文字研究会（1993）『世界の文字の図典』吉川弘文館，p.347

田蔵 Tian Wei ハルビン理工大学准教授 専門：言語学、音声学
徐英東 Xu Yingdong ハルビン理工大学准教授 専門：日中対照言語学